

# 「青春トライアングル」

第 1 話

—初稿—

2022/12/9

米俵

〈人物表〉

小林 藍花	(16)	私立高校1年
大森 奈々	(16)	私立高校1年
鈴木 建人	(16)	私立高校1年

〈ログライン〉

藍花は、奈々と建人の告白を聞き、自分の気持ちも建人に伝え、振られる話。

1 藍花の家・リビング（朝）

築20年程度の一軒家、リビング。  
リビングの隅にクリスマスツリーが飾られている。  
小林藍花（16）、ソファアに座り、冷やしたスプ  
ーンを目にあてている。

2 藍花の家・リビング（昼）

藍花、鼻歌（クリスマスソング）を歌いながら、テ  
ーブルセッティングをしている。

小皿、3つのシャンパングラスを並べる。

インターホンが鳴り、出る。

藍花「開いてるから、入ってきていーよ」

大森奈々（16）、鈴木建人（16）がリビングに  
入ってくる。

建人「藍花、お前、さすがに1人の時は鍵閉めとけよー」

藍花「だって、建人達が来るの分かってたし」

奈々「でも、何かあったら危ないから」

藍花「奈々ー、心配してくれるの？ ありがとう」

藍花、奈々を抱きしめる。

建人「俺の時と全然違うのな」

建人、台所を買ってきた荷物を置く。

藍花「建人、今回は、どこの買ってきた？」

建人「ケンタッキーとモスと……ファミマ」

藍花「そんなに食べられないでしょ」

建人「お前が毎度文句言うからだろー。黙って食っとけ、

チキン脳め」

藍花「チキンハート君に言われたくありません」

建人「お前、意味分かって使ってる？」

藍花、建人を叩きながら、

藍花「分かってるわ」

奈々、二人の様子を見て、口を両手で隠しながら笑  
っている。

× × ×

3人、席に座っている。

テーブルの上に3種類のチキンのつた大皿とサラダの大皿とピザ。ポテトチップス、ポッキーなどのお菓子が並んでいる。

建人、シャンメリーのフタを握りながら立ち上がる。

藍花、天上の角を指さしながら、

藍花「あの辺ならいける」

建人「いくぞ、せーの」

三人「メリークリスマス」

勢いよくフタが飛んでいく。

建人、シャンメリーをグラスに注ぐ。

奈々、サラダを取り分ける。

藍花、チキンを食べ始める。

建人「お前の両親相変わらず仲良いのな」

藍花「外だと恥ずかしいよ」

奈々「えー。羨ましいけどな」

藍花「正直、ママのダーリン呼びが一番きつい」

建人「で、今年のプレゼントは何だった？」

藍花「お二人さん、聞いて驚くんじゃないよ。なん

と……」

3人「問・題・集」

3人笑う。

藍花「今年のご丁寧に5教科ありました」

藍花、1人で拍手をする。

建人「お前の成績を良く分かってんな」

藍花「自分たちはラブ旅行行ってるのに、私にだけ現実つ

きつけてくるんだよね」

藍花、シャンメリーを一気に飲む。

奈々「頑張って進級しないとね」

藍花「今は考えたくありません」

藍花、チキンを勢い良く食べる。

× × ×

藍花、冷蔵庫を開けて、棒読みで、

藍花「あー。ケーキ取ってくるの、忘れてたー。今からち

よつと行つてくるー」

奈々「えっ、私も行くよ」

藍花「いいよ、いいよ。すぐそこだから。お二人でごゆっ

くりー」

建人、小声で、

建人「あいっ……下手くそか」

奈々「え？」

建人「あ、いや。なんでもない。まあ待ってようよ」

3  
藍花の家の前の道（昼）

藍花、家の方を振り返りニヤニヤとする。

鼻歌を歌い、ケーキ屋に向かう。

× × ×

鼻歌を歌い、ケーキを持って戻ってくる。

しばらく家の前をウロウロする。

携帯を見て、家の中へ入っていく。

4  
藍花の家・リビング（昼）

藍花、リビングの扉を開けながら、元気良く、

藍花「たっだいまー」

建人、下を向いている。

奈々、涙目で藍花を見る。

藍花、ケーキを落とす。

藍花、建人を突き飛ばしながら、

藍花「あんた、奈々に何したの」

建人、椅子から落ちて、

建人「いってー。なんもしてねーよ」

藍花「じゃあ、なんで奈々が泣いてんのよ」

奈々「違うの、藍花。私が吐き出しただけだから」

藍花「え？」

奈々「藍花が好きだって」

藍花「え？」

建人「奈々、チキン脳にはちゃんと言わねーと伝わらねー」

ぞ」

奈々、藍花の目を見て、

奈々「藍花のことが好きなの」

藍花「私も奈々が好きだけど……」

奈々「違う……」

藍花「えっと……ライクじゃなくて、ラブってこと？」

奈々、頷く。

藍花「そ、そうなんだ……」

藍花、ふらふらとケーキを取りに行く。

ケーキを机の上に置き、箱を開ける。

形の崩れたケーキ。

ナイフでケーキを切る。

お皿に取り分ける。

藍花、奈々にケーキを渡しながら、

藍花「奈々、ありがとう。でも、ごめん……。私も好きだ

けど、奈々とは友達で居たい」

奈々「うん、分かってる」

奈々、笑顔。

奈々、崩れたケーキを見つめながら、

奈々「振られケーキ」

藍花、焦った様子で、

藍花「あ、ごめんっ。ケーキ渡しながら言ったから……」

建人「俺にも振られケーキくれよ」

藍花、建人にケーキを渡しながら、

藍花「建人、さつきはごめん」

建人「あー、心も体もいってーわ」

奈々「建人くん、ごめんね」

建人「奈々、改めて謝られると余計にくるからやめて」

藍花「建人、泣いてもいいよ？」

建人「泣かんわ」

藍花「えっ泣かないの？」

建人「うるせーよ」

藍花、自分のケーキを見つめながら、

藍花「……私、昨日泣いたよ」

奈々「え？ どうして？」

藍花「建人に、奈々に告白するから協力しろって言われた」

奈々「え？」

建人、呆けた顔で、

建人「は？」

藍花「私は建人が好きだった」

建人「はー？ なんで今言うんだよ」

藍花「だって、二人が告白して、私だけ言わないとか卑怯じゃん」

建人「……」

藍花「返事は？」

建人「好きな人がいるから、ごめん」

藍花、笑顔で、

藍花「それでよし」

建人「なんか、ごめん……」

藍花「なんで？ 知らなかったんだから、仕方ないじゃん。むしろ、今言えてすつきり。2人のおかげ」

建人「協力しないってのもあったんじゃない？」

藍花「なんで？ 好きな人が幸せなら、嬉しいじゃん」  
建人と奈々、顔を見合わせる。

奈々、両手で口を押さえて笑いだす。

建人「分かった分かった、お前には色々と勝てんわ」

藍花「まあ、私も泣いた後で気付いたんだけど」

奈々「藍花、凄いね」

建人「しっかし、見事なまでの一方通行トライアングルだなー」  
藍花、トライアングルを鳴らす真似をして、

藍花「チーン」

建人「やめとけ」

3人笑う。

藍花「とりあえず、振られケーキ食べますかー」

(おわり)